

ブリーフスとプロレタリアート問題

—経営の人間問題と社会的カトリシズム—

増 田 正 勝

目 次

- I 序 論
- II プロレタリアート社会学の課題
- III プロレタリア的不安と資本主義的エートス
- IV プロレタリア的不安の社会経済的源泉
- V 結 論

I 序 論

ヨーストックは、社会的カトリシズムにおける「新しい世代の出現¹⁾」について語り、次のように書いている。「典型的な大戦前の文献と並べて、たとえば、ブリーフスの、シュペングラーに対決したすばらしい著書やヒッツェ記念論文集に寄せた論文を読んでみるがよかろう。精神的な距離を測定できるというものである¹⁾と。新しい世代の背後には、資本主義に対してより批判的な態度を堅持しようとする強い欲求が横たわっていた。ワイマール期のミュンヘン・グラッドバッハ学派を、したがってケーニッヒスヴィンター・クライスの人々を支えていたものも、かかる欲求であった。本稿でとりあげる「新しい世代」の一人、ブリーフスを、閑静な大学都市フライブルクから喧噪に満

1) Jostock, Paul : *Der deutsche Katholizismus und die Überwindung des Kapitalismus. Eine ideengeschichtliche Skizze*, Regensburg 1932, S.179.

ちた首都ベルリンへ招き寄せたのもまた同じ欲求のなせる業であった。

ブリーフスは、フライブルク大学で恩師シュルツェ・ゲフェルニッツ (Schultze-Gevernitz, Gerhard von) の講座を引き継いでいた。かつてはマックス・ウェーバーも担当していた講座である。ブリーフスの子息は彼の父のフライブルク時代について次のように述べている。「フライブルク時代は、専門分野における稔りゆたかな学問研究の時代であったばかりではなく、哲学・神学・政治学・社会学等の隣接科学への、形式にとらわれない探求の時代でもあった²⁾」と。ブリーフス家には、哲学者のフッサール、ハイデッガー、ステパン (Stepun, Fedor)、ヘッセン (Hessen, Sergius)、神学者のクレブス (Krebs, Engelbert)、カトリック思想家のロマーノ・グアルディーニ等が親しく出入りしていたという。とりわけマックス・シェーラーとは親交があったようである。ブリーフス門下の一人プフィスターによれば³⁾ 以下の三つの著作がフライブルク時代を代表しているという。

Briefs, Goetz: Zur Kritik sozialer Grundprinzipien, in; *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, 49. Bd., 1922 und 50. Bd., 1923.

———: Das gewerbliche Proletariat, in; *Grundriss der Sozialökonomik*, IX. Abteilung, 1. Teil, Tübingen 1926.

———: Gewerkschaftswesen und Gewerkschaftspolitik, in; *Handwörterbuch der Staatswissenschaften*, 4. Aufl., 4. Bd., Jena 1927.

いずれもブリーフス研究にとっては重要な文献である。前二者は、論文にしては長大なものであり、プフィスターは「単行本として出版されなかったことが惜しまれた⁴⁾」と回顧している。しかしニッゲマンによって作成されたブリーフスの著作目録⁵⁾では、二番目の著作は著書に分類されている。われわ

2) Briefs, Godfrey E: Goetz Briefs' Life and Work, in; *Social Oder*, A Festschrift for Goetz Briefs, Vol. 9, No. 5, Saint Louis 1959, p. 198.

3) Pfister, Bernhard: Goetz Briefs zum 80. Geburtstag, in; *Soziale Verantwortung. Festschrift für Goetz Briefs zum 80. Geburtstag*, herg. von J. Broermann und Ph. Herder-Dorneich, Berlin 1968, S. XI.

4) Pfister, Bernhard: a. a. O., S. XII.

5) Bibliographie über Goetz Briefs. Zusammengestellt von Jürgen Niggemann, in; *Soziale Verantwortung*, SS. 679-696.

れも、ニッゲマンと同じく、それを著書として取り扱いたいと思う。なおこの論稿は、1937年になって亡命先のアメリカで単行本として出版されることになる⁶⁾。本稿において、われわれは、この二番目の著作『産業プロレタリアート論』に注目する。

1926年、ブリーフスは、プロイセン州文部大臣ベッカー (Dr. Becker) の強い要請を受けてベルリン工科大学へ移ることになる。担当講座は同じ国民経済学であったが、特別な仕事がブリーフスを待ち受けていた。経営社会学研究所の創設がそれである。ベッカーの要請の中にはこの仕事の件もなんらかの形で含まれていたと推測される。経営社会学研究所 (Institut für Betriebssoziologie und soziale Betriebslehre) は1928年夏に発足し、成立期のドイツ経営社会学を担う重要な役割を果たすことになる。

ところで、一体なにが国民経済学者ブリーフスをして経営社会学および経営社会政策論の問題領域へ近づけせしめたのであろうか。ゲックは、「経営の社会問題をブリーフスに強く印象づけたものは、ヘルパツハ (Hellpach, Willy), ローゼンシュトック (Rosenstock, Eugen), ミッヘルズ (Michels, Robert) の諸文献であった⁷⁾」と指摘している。しかしわれわれは、ゲックのこの言葉に満足することはできない。問われるべきことは、ブリーフスをそれらの諸文献へ接近せしめたものは何か、ということである。

この問題を解く鍵は、とりわけ前掲の二番目の著『産業プロレタリアート論』にあると思われる。ブリーフスは、後述の如く、この著以前にもいくつかのプロレタリアート論を書いている。われわれは、彼のプロレタリアート論の中に、経営社会学的・経営社会政策的問題領域に対する関心の萌芽と昂揚をみるのである。そしてかかる関心を根底から支えていたものが、本節の最初に述べたかの欲求に他ならない。ブリーフスにおいて、社会的カトリシ

6) Briefs, Goetz : *The Proletariat. A Challenge to Western Civilization*, New York and London 1937.

7) Geck, L. H. Adolph : *Zur Entstehungsgeschichte der Betriebssoziologie*, in; *Soziologische Forschung in unserer Zeit*, hrsg von Karl Gustav Specht, Köln / Opladen 1951, S. 112.

ズムと経営社会学および経営社会政策論が交叉し、ブリーフスを通して社会的カトリシズムは、経営の人間問題に対する新たな視角を獲得していくのである。

II プロレタリアート社会学の課題

学問的に多くのものを継承しながらも、ブリーフスが乗り越えようとした二人の社会学者がいる。ゾムバルトとブレンターノである。ゾムバルト批判の上に構築されるのがブリーフスのプロレタリアート論、つまりプロレタリアート社会学 (Soziologie des Proletariats) であり、ブレンターノに鋭く対決しつつ展開されるのが、その労働組合論である。ここでは彼のゾムバルト批判が注目されなければならない。ブリーフスは、ゾムバルトとの対決を通して、自らのプロレタリアート社会学に、いかなる課題を突きつけようとするのか。これが、まずわれわれの問題である。

最初のゾムバルト批判は、1923年、*Kölner Vierteljahresheft der Soziologie* 誌に寄せた論稿「プロレタリア的なるものの社会主義的なるものに対する関連について」にみられる。これは、ゾムバルトの著『社会主義と社会運動』 (*Sozialismus und soziale Bewegung*, 8. Aufl., 1919.) に向けられたものであった。ゾムバルトは、この著の中で、プロレタリアート即社会主義、ないしは社会主義即プロレタリアートとみる、きわめてマルクス主義的な見解を明らかにしている。すなわちいう、「現代の社会主義は、それが、階級闘争の道による生産手段の社会化をめざし、またプロレタリアートによって担われるかぎり、マルクス主義的精神に満たされている。社会主義はプロレタリアートの的になっており、かつまたプロレタリアートは社会主義的になっている⁸⁾」と。社会主義を、近代資本主義に対する宿命的な反作用現象としてとらえるのである。

8) Sombart, Werner : *Sozialismus und soziale Bewegung*, 8. Aufl., Jena 1919, S. V. 林要訳『社会主義及び社会運動』(同人社 1925年) 4頁。

かかるテーゼに対してブリーフスは、以下のように反論する。「資本主義と社会主義との関係は、個別的事情に応じた諸原因に由来するものであって、普遍的宿命に起因するものではない⁹⁾」「社会主義へ導くところのかのプロレタリア的生活状態は、必然的に資本主義から生まれてくるのではない⁹⁾」と。そしてゾムバルト自身の著『何故米国には社会主義が存在せざるや』(*Warum gibt es in der Vereinigten Staaten keinen Sozialismus?* Tübingen 1906.) が、彼自身のテーゼを裏切っているのではないかという。ブリーフスによれば、ドイツは「社会主義的思想がプロレタリアートにおいて最も強力かつ原則的に展開している国¹⁰⁾」である。これは、米国にはみられない特殊な現象である。したがってブリーフスはいう、「歴史的かつ特殊ドイツ的状况から理解されるところのプロレタリア的思考と社会主義的思考の結合は、プロレタリアートが社会的統合・政治的権利・職分・責任を獲得するにしがって解体していくであろう¹¹⁾」と。ゾムバルトのテーゼに対して、一定の歴史的・ドイツ的特殊状况が解明さるべきことを主張するのである。ブリーフスは問う、「資本主義は、いかなる条件のもとで、プロレタリアートが社会主義的思想・運動を伴ってそれに反動するところのかの生活状態・生活条件を生ぜしめるのか¹²⁾」と。これが、彼自身自らのプロレタリアート社会学に設定した根本的課題に他ならない。

ゾムバルトの前掲書の第10版(1924年)は『プロレタリア的社会主義』と改題され、内容も改められた。この書に対してもブリーフスは批判を展開している。二つの論稿がある。カトリック文化誌 *Hochland* に寄稿した「一般的社会問題と“プロレタリア的社会主義”」(1925/26年)と、シュモラー年報に寄せた「“プロレタリア的社会主義”——ゾムバルトとの対決」(1926年)がそれである。前者の論文はとくに重要である。そこには、われわれが注目

9) Briefs, Goetz : Über das Verhältnis des Proletarischen zum Sozialistischen, in ; *Kölner Vierteljahreshefte der Soziologie*, 3. Jg., 1923, S. 102.

10) Briefs, Goetz : a. a. O., S. 103.

11) Briefs, Goetz : a. a. O., S. 109.

12) Briefs, Goetz : a. a. O., S. 102.

する1926年の著『産業プロレタリアート論』のデッサンが示されているからである。

『プロレタリア的社会主義』におけるゾムバルトの立場はブリーフスの見解に近づいてる。プロレタリアート即社会主義とみなすテーゼは姿を消している。それゆえブリーフスは次のようにいう、「プロレタリアートとマルクス主義は歴史的なるものの平面で邂逅した。ゾムバルトが第2巻第6章において両者の関係について言明していることは、まさにこのことである。私は、かかる見解に全面的に同意する¹³⁾」と。しかしその内容に関しては、以下の如き疑問を表明している。

まず第一にはゾムバルトのいう「プロレタリア主義」(Proletismus) に対してである。ゾムバルトによれば、「プロレタリア主義とは、プロレタリア的社会主義の根本理念 (Uridee) であって¹⁴⁾、大衆生活価値 (Massenlebenswert) なる一定の価値設定が自由と平等のイデオロギーと結合することによって生まれてきた精神的形象である。この場合、大衆生活価値とは、「この地上での生と幸福を最高の価値として評価することである¹⁵⁾」。ゾムバルトは、そこに物質主義的な快樂主義をみるのである。ブリーフスは、プロレタリアートの心的態度をこのように一元的に規定してしまうことに反対する。「理念と現実との関係は、かかる一元的な解釈によってとらえることはできない¹⁵⁾」と。プロレタリアートの精神的態度の多様性や社会主義イデオロギーの多元性がその証左であるという。ゾムバルトのプロレタリア主義なる概念は、理念自体の運動を軽視し、「一種の唯物論¹⁶⁾」になっていると批判する。

他方で、ブリーフスは、ゾムバルトをあまりにも唯心的かつイデオロギー的だと非難する。すなわちいう、「ゾムバルトを公平無視に読んでみてだれしも

13) Briefs, Goetz: "Proletarischer Sozialismus". Eine Auseinandersetzung mit Werner Sombart, in; *Schmollers Jahrbuch*, 50. Jg., 1926, S. 19.

14) Sombart, Werner: *Der proletarische Sozialismus*, Bd. I., Jena 1924, S. 86. 田辺忠男訳『プロレタリア的社会主義』(日本評論社 1932年) 147頁。

15) Sombart, Werner: a. a. O., S. 87. 邦訳 149-150頁。

16) Briefs, Goetz: Das allgemeine Sozialproblem und der „proletarische Sozialismus“, in: *Hochland*, 23. Jg., 1925/26, S. 734.

受ける印象は、社会主義理念がプロレタリア的生活状態に対して最大の親和性を有していたがゆえに、その理念から運動が燃え上がったということである。多かれ少なかれ理念が運動を担うのだということを、われわれは第1巻の中に読みとる¹⁷⁾と。前とは逆に今度は理念に偏重し、現実の作用を軽視しているというのである。もっともゾムバルトといえども、理念と運動の関係を単純に措定しているわけではない。両者を媒介する「中間肢」(Zwischenglieder)の存在を指摘している。一般的経済状態、一般的政治状態および国民的諸特性(nationale Besonderheiten)がそれである。これらの諸要因は、プロレタリア社会主義の「社会学的源泉」として第4章で考察されている¹⁸⁾が、各項目に関してわずか5頁前後の叙述がなされているにすぎない。第5章の「心理学的源泉」が第4章のおよそ2倍の頁数を費しているのとははなはだ対照的である。ブリーフスは、そこに社会的・経済的・政治的諸要因の軽視をみる。そしてこう主張する。「かかる経済的・政治的事実が社会主義とプロレタリアートとの結合に果たした機能は、たんなる中間肢以上のものがある¹⁹⁾」「各国のプロレタリアートにおける社会主義の浸透は、彼らに対する経済的・社会的・政治的抑圧の強さに本質的に依存している¹⁹⁾と。むしろゾムバルトのいう社会学的源泉こそが重視されなければならないというのである。

プロレタリアート問題の本質は、資本と労働が容易に克服しがたき敵対的形象として立ち現われてくるところに存する。ブリーフスはいふ、「近代の社会経済的状况と社会経済観は、資本と労働、ブルジョワジーとプロレタリアートの対立の上に鑄造され、そればかりかすべてこの対立へ還元される²⁰⁾」「かかる対立こそが、一般社会生活の緊張に対してその解釈と通俗的表現を与えているところのかの Kategorie に他ならない²⁰⁾と。中心にあるのは単なる経

17) Briefs, Goetz: „Proletarischer Sozialismus”, S. 19.

18) Sombart, Werner: a. a. O., SS. 31-44. 邦訳 47-77頁。

19) Briefs, Goetz: Das allgemeine Sozialproblem. . . ., S. 733.

20) Briefs, Goetz: *Das gewerbliche Proletariat*, in; *Grundriss der Sozialökonomik*, IX. Abteilung, 1. Teil, Tübingen 1926, S. 145.

済的利害対立ではない。プロレタリア的不安に発する固有のアンタゴニズムとルサンチマンが、かかる対立をいっそう深刻かつ苛烈なものにしてきた。プロレタリア的不安とはなにか。ブリーフスはいう、「プロレタリア的心情は二重に醗酵する。まずそれは、その時代の一般的な精神的不均衡と緊張によって苦しみを受ける。そしてその上さらにプロレタリアートの経済的・社会的状況から生まれてきた特殊な心的負荷に苦しめられる²¹⁾」と。このような認識の根底には、上にみてきた如きゾムバルト批判がある。プロレタリアート問題は、理念もしくは現実の一方的過程としてではなく、二重の過程としてとらえられるべきなのである。かかる二重の醗酵過程の構造を解明していくところに、ブリーフスのプロレタリアート社会学の課題があったといえよう。

III プロレタリア的不安と資本主義的エートス

ブリーフスは、プロレタリアートの概念を次のように定義する。「社会学的意味におけるプロレタリアートとは、自らの生活状態に対して特殊な社会的反応を展開するところの持続的かつ世襲的に賃金関係に拘束された人々の階層である²²⁾」と。ここにいう特殊な社会的反応が、プロレタリア的不安に発する一定の心的態度に他ならない。アンタゴニズムとルサンチマンを内包したプロレタリアートの心的態度は、即述の如く、二重の醗酵過程を経て形成されてきた。すなわち特定のエートス的狀況に由来する醗酵過程と、一定の政治的・社会経済的状況から生まれる醗酵過程とがそれである。本節では前者の問題をとりあげる。

エートス的狀況を規定する要因は多様である。ブリーフスはたとえば以下の如き諸要因をあげている²³⁾ 既成の社会・経済体制を否定的に (als "Nicht-

21) Briefs, Goetz : Das allgemeine Sozialproblem. ..., S. 524.

22) Briefs, Goetz : Proletariat, in; *Handwörterbuch der Soziologie*, hrsg. von Alfred Vierkandt., Stuttgart 1931, S. 443.

23) Briefs, Goetz : *Das gewerbliche Proletariat*, SS. 159-160.

sein-Sollendes”) とらえる思想や新秩序を求めるさまざまな思考の展開、民主主義思想の拡大、連帯性と闘争性を内包した階級意識の形成、プロレタリアートなる名称に潜在するルサンチマン的傾向等々である。しかしブリーフスは、「プロレタリアートの精神的背景はもっと深いところにある²⁴⁾」という。彼のいう資本主義的エートスがそれである。

資本主義的エートスとはなにか。ブリーフスは述べる、「決定的な価値レベルは、経済である。資本の回転による取得 (Erwerben)・利用 (Verwerten)・所有 (Besitzen) への意志がそれである²⁵⁾」「世界と生活は、利用の次元で浅薄化する。存在と生活の内実は、鮮明なるコントラストをなす収益・非収益へ荘厳に環元されていく。形態と意味に先立って素材 (Stoff) が存在しはじめるのである²⁵⁾」と。経済的価値を絶対視するこのような価値観は、ブリーフスによれば、ルネサンスに源流をもつ啓蒙思想、近代合理主義の産物である。近代合理主義とともに、あらゆる人間的存在と価値の相対化が進行し、「人間および人間労働の伝統的価値評価は、純粋な経済的目的考慮に向って変容していく²⁶⁾」絶対主義の経済政策の中で育成された homo captalisticum たる新興ブルジョワジーは、旧勢力とその生活形態に反抗してブルジョワ的富裕の世界像と生活形態を築き上げる。旧秩序の「権力なる富」(Machtreichtum) に代って「富なる権力」(Reichtumsmacht) が登場する。「エートスの変化が社会的価値評価の新たな尺度を生み出した²⁷⁾」のである。「資本主義的富に内在する力——拡張力、人間とその生活基礎への支配力——により、また富なる権力による旧社会秩序原理の脆弱化により、さらに富に必然的に織りこまれた社会的評価によって²⁷⁾」かかる資本主義的エートスは、あらゆる社会階層へ浸透し、重要な社会学的作用をもたらしてきたのである。では資本主義的エートスは、いかなる意味においてプロレタリア的不安の源泉となるのか。

ブリーフスはいふ、「富裕と富裕への意思それ自体はけっして道徳的資格な

24) Breifs, Goetz : a. a. O., S. 161.

25) Breifs, Goetz : Das allgemeine Sozialproblem....., S. 513.

26) Breifs, Goetz : a. a. O., S. 514.

27) Breifs, Goetz : a. a. O., S. 515.

いし道徳的行為ではない。富が、自らの社会的責任と全体への奉仕を承諾し、それを有効に行使するときにはじめて、社会的・政治的諸関係の持続的秩序が富の上に築かれる。ところがブルジョワ的富は、全体へのかかる本質的関連をまったくもっていない²⁸⁾と。もともと個人主義原理に立つ資本主義的社会原理は、一般的社会原理たり得ない。それはかえって、「社会的共同生活を本質的に市場関係へ還元せしめ、あらゆる生活関係と存在形態を解体し、一般社会生活に緊張を生み増殖させる²⁸⁾」のである。個人主義的社会経済原理は、したがってそれ自体の中に社会的対立・抗争の要因を内包している。にもかかわらず「ブルジョワ資本主義的社会——個人主義的交換社会——が存続し得ているのは、本質的原理から活動している共同体秩序と国家秩序の力強い底層がなお生き続けているからである²⁸⁾」と。したがって資本主義的エートスはきわめて脆弱な基礎の上に立っているといわなければならない。自らが破壊すべき底層にそれ自体の全存在を負っているのである。資本主義的エートスの道徳および社会原理として無資格性の中に、ブリーフスはまずプロレタリア的不安のもっとも深い源泉をみる。

資本主義的エートスのもうひとつの問題は、ブリーフスによれば、価値観としてのその不適格性にある。近代合理主義は超越者を否定してあらゆる価値を相対化した。ところが人間精神の基本的衝動たる絶対者への衝動は、なんらかの代償を求める。その結果、「その本質からしてもともと相対的であるところの価値序列が絶対化される²⁹⁾」ことになった。経済的価値の絶対化、経済中心の思考がそれであった。しかしこのような絶対化に基礎を置くブルジョワ的価値観と生活観は、「その本質からして普遍的価値観、普遍的生活観になることはできない。なぜならばかかる価値表象と生活形態は、資本主義的形態において富を所有する階層においてのみ実現可能だからである³⁰⁾」。にもかかわらずブルジョワ的価値観は、あらゆる社会階層に浸透し、プロレタ

28) Briefs, Goetz : a. a. O., S. 516.

29) Briefs, Goetz : *Das gewerbliche Proletariat*, S. 161.

30) Briefs, Goetz : *Das allgemeine Sozialproblem*....., S. 517.

リアートの価値像・生活観の形成に対しても決定的なモデル作用をもたらしてきた。ここにプロレタリア的不安のもうひとつの重大な源泉がある。社会経済的状況のゆえにかかる価値実現に参加できないプロレタリアートを、被圧迫感と欠乏感が襲い、そこに固有のアンタゴニズムとルサンチマンが醸成されていく。資本主義的エートスそれ自体が、ここでもまた資本と労働、ブルジョワジーとプロレタリアートの間に対立と緊張をもたらす本質的要因を包含しているのである。ブリーフスはいう、「まさにここに資本主義時代における社会的緊張の世界観的・倫理的な根本原因が存在する³¹⁾」と。

ブリーフスによれば、ここに問題にされているエートス的状況は、プロレタリアートのみを覆っている影ではない。近代人全般が同質的状況の中に置かれているのである。それは、ゾムバルトが「世界の、神からの離反」(Entgottung der Welt)としてまたウェーバーが「呪縛からの世界の解放」(Entzauberung)として特徴づけたかの価値転換の醗酵過程の結果に他ならない。ブリーフスはいう、「ここに最も内奥にあるもの、つまり近代人の心底に横たわる空虚さが露呈される³²⁾」「求めるものが悉く獲得されたとしても、プロレタリアートはなお、充たされざる無窮の前に立たずむ。かかる事態は、われわれの時代における支配的価値、すなわち経済的権力及び社会的勢力なる価値の本質に由来するものである³²⁾」と。プロレタリアート問題においては、資本主義的エートスの、世界観および道徳としての欠陥が根本的に問題とされねばならないのである。

IV プロレタリア的不安の社会経済的源泉

社会経済的意味におけるプロレタリアートとは、ブリーフスによれば、「その労働力の不断の売却の中に、殆ど唯一の収入源、生活維持の決定的所得源

31) Briefs, Goetz : *Das gewerbliche Proletariat*, S. 162.

32) Briefs, Goetz : a. a. O., 238.

を有し、それ故、賃金労働関係の持続的再生産を余儀なくされているところの賃金労働者である³³⁾ 賃金労働関係それ自体がプロレタリア的不安の源泉となるのではない。賃金労働関係をめぐるある特定の状況が、プロレタリアートに固有の心的態度を醸成し、深刻な社会的緊張を生起せしめるのである。そのエートス的状況については前節において考察してきた。ここでは二重の醗酵過程のもうひとつの過程、すなわち社会経済的状況が注目されねばならない。ブリーフスはいふ、「プロレタリアート各自が直接的に感知している近代経済の否定的諸現象に対して、自ら批判を喚起し先鋭化せしめるときはじめて、経済体制批判が開始される³⁴⁾」と。したがってかかる否定的諸現象を個別的に解明していくことが、プロレタリアート社会学のもついまひとつの中心的課題となる。以下、ブリーフスの示すところを概観しておこう。

1. 商業化過程。その意味するところは、「労働力の商業化 (Kommerzialisierung) と労働力の商品特質、並びにこれらと関連して、生産過程の社会的側面が生産参与者間の純粋な貨幣的關係へ即物化される事態³⁵⁾」である。三つの否定的現象がこの過程において生じてくる。

a) 安定した生活基盤の欠如。これは、労働市場の構造、需給関係の変化や景気変動の如き一般的要因以外に、労働者個人の個別的要因にも由来する。たとえば疾病・労災・老令化・性的差別・特定の適性の欠如等といった諸要因がある。「ブルジョワ的かつ当今の“標準的”基本意識は、財産所有において実現される絶対的生活安定をめざしている³⁶⁾」がゆえに、生活基礎の不安定性はいっそう過酷なものとして受けとられる。階級的搾取の思考が生まれ、「被搾取の確信が、プロレタリア的不安のもっとも激烈なモチーフを形成する³⁷⁾」ことになる。

b) 労働の即物化。労働力の商品化の結果、労働と労働関係はその道徳的

33) Briefs, Goetz : a. a. O., S. 150.

34) Briefs, Goetz : a. a. O., S. 154.

35) Briefs, Goetz : a. a. O., S. 155.

36) Briefs, Goetz : Das allgemeine Sozialproblem. . . . , S. 520.

37) Briefs, Goetz : *Das gewerbliche Proletariat*, S. 155.

内容を喪失し、純然たる契約関係が出現する。道徳的な労働意思と労働の喜びが後退して、経済的・経営規律的強制が登場する。「企業者は専ら技術的・経済的目的に即して物的給付を要請する。だが労働者は、かかる給付の実行が人間的・人格的価値の世界に包摂されていることを理解せよと主張する³⁸⁾」ここに特別の心的緊張が生まれてくる。労働条件や労務管理の改善は部分的にこの緊張を緩和する。しかし「高賃金といえども、フォードが主張した如くに緊張の90パーセントを除去するものではない³⁸⁾」企業者の経済中心的思考と労働者の価値観の対立は、容易に止揚し得る性質のものではない。

c) 労働者の社会的評価の下落。いくつかの要因がある。その社会に伝統的な価値尺度がプロレタリアートに不利に作用していることもあろう。あるいは文化や政治への市民的参加の立ち遅れが、低い社会的評価につながっていることもあろう。しかしブリーフスは、「生産の精神的・道徳的責任の担い手が、ある特定の社会階層に委ねられている³⁹⁾」という事態を重大視する。すなわち指揮労働と執行労働の垂直的分化が階層的差別をいっそう押し進めるのである。さらにこれにはプロレタリアートに不利な所得配分体系が対応している。もうひとつの重大な要因がある。低賃金と「労働給付の劣等化³⁹⁾」(Degradation) がそれである。労働者が労働の意義と動機をもっぱら賃金所得にのみ見出さざるを得ない状況に置かれているとき、低賃金と労働内容の劣等化は、労働者の社会的評価に対して著しい減価作用を生ぜしめる。

以上の如き商業化過程は、労働力の売り手である労働者の側でも進行する。売り手として自らも労働力の商品特質を強調せざるを得ない。企業者側の巧妙なる賃金政策・労務政策に対して、労働者側も特別な行動を展開する。“Watering of the labor”なる言葉はかかる過程をもっともよく象徴している。対応的に労働者の側でも進行する商業化過程は、労働と労働関係の即物化・没人間化の過程に相乗的效果を与えることになるのである。

2. 人間労働の材料化過程。収益性を志向する企業者は、「費用を要する経営材料 (kostende Betriebsstoff) の類推にしたがって、労働を把握し“管理す

38) Briefs, Goetz : a. a. O., SS. 155-156.

る”³⁹⁾ 理想的経営材料の諸特性、すなわち低廉性・効力性・適応性・節約性・柔軟性・計算可能性・代替性等の諸特性が、人間労働にも要求される。テイラーの科学的管理法は、かかる理想的経営材料の思考を徹底的に追求したものに他ならない。

材料化の過程の中で、労働の“人間的使命”(Aufgaben)としての特質が欠落していく。労働はもはや、「実現さるべき有意味にして貴重なる全体として、労働する人間に向き合っていない⁴⁰⁾」「生き生きとした労働の自然的律動は、経営の律動(Betriebsrhythmus)へ、精確に計算され組織された経営の物的目的関連の律動へ解消されていく⁴⁰⁾」材料化の過程とはいわゆる機械化の過程に他ならない。それは、人間労働の専門的部分労働への分解と、それらの部分労働の機械的統合を特徴とする過程である。この過程において、労働者の人間的・人格的諸欲求は不合理なるものとして排除されていく。もっともかかる合理化過程に対して労働者も抵抗を試みてきた。しかしブリーフスによれば、いまのところそれも、「労務管理政策における経営材料理念の強力なる貫徹を阻止するには至っていないのである⁴⁰⁾」

3. 労働者の従属化過程。近代経営は、厳格な上位下位秩序を要請し、「経営規律が経営ヒエラルヒーの生活原理となっている⁴⁰⁾」すなわち絶対的な命令・服従関係が近代的経営体制の特質を成しているのである。経営規模の拡大に伴ってかかる特質はいつそうあらわになってきた。賃金労働はそれ自体もともと従属労働であるが、近代的経営体制は、その特質を通して労働者の従属度と従属感をいつそう高めていく。

命令・服従関係は、他人決定(Fremdbestimmung)によって特徴づけられる。職場配置・作業方法・作業手段・労働目的・労働強度・作業時間・作業組織等すべて上位者によって決定される。労働者は一方的に命令されたことを実行するだけである。他人決定がまず労働者の従属化過程を進めていく。命令地位と服従地位の間には、専横・誤解・不信・不正の入りこむ余地が不可避免的に生じ、このことがいつそう労働者にとって従属関係を耐えがたいも

39) Briefs, Goetz : a. a. O., S. 157.

のにしていく。そればかりではない。経営的服従関係は往々にして、「経営の客観的必要の限度を越えて、労働者の個人的・市民的生活領域にまで及び、そこに経営農奴制 (Betriebshörigkeit), 産業封建制 (Industrialfeudalismus) の傾向を生ぜしめる⁴⁰⁾」経営体制に発する労働者の従属化過程が、プロレタリア的不安の源泉のひとつを形成していく。

4. 生活環境の劣悪化過程。経営規模の拡大および工場の集中と都市化とは相互関係にある。都市が経営の拡大・集中を促し、そのことがさらに都市化を進める。都市は一大労働市場となり、不断に人間を吸収し押しこめる。しかしそこには劣悪な居住条件が待っている。しばしば灰色の労働者地区が形成される。大都市において、ブルジョワ的富とプロレタリア的貧困がもっとも鮮明に浮き彫りにされる。ここでブリーフスはヨーストックの言葉を引用している。「他の富裕なる生活空間からはいかなる暖かい光もさしてこない。ここにおいてほど、量から質への転換という言葉が歴然たる意味をもってくるところはあるまい⁴¹⁾」と。プロレタリアートの心底にアンタゴニズムとルサンチマンが育っていくのである。

以上、われわれは、ブリーフスによって示されたプロレタリア的不安の社会経済的源泉をなす問題複合を概観してきた。最近、メイソンは、ブリーフスのプロレタリアート論をとりあげて批判している。「本来の意味における経済政策的問題（経済成長）をすべて等閑視し、そのうえさらに教育の機会と社会的移動の重要な領域を完全に無視している。極度に狭く静態的な展望が、ブリーフスの研究を異常なほどに特徴づけている⁴²⁾」と。公平にみて、ブリーフスを十分に理解したうえでの批判とは思えない。ブリーフスは、『産業プロレタリアート論』の最後の頁で、「労働者階層の向上とプロレタリアート性の緩

40) Briefs, Goetz : a. a. O., S. 158.

41) Briefs, Goetz : a. a. O., S. 159.

42) Mason, Tim W : Zur Entstehung des Gesetzes zur Ordnung der nationalen Arbeits vom 20. Januar 1934 : Ein Versuch über das Verhältnis "archaischer" und "moderner" Moment in der neuesten deutschen Geschichte, in : *Industrielles System und politische Entwicklung in der Weimarer Republik*, Bd. 1., hrsg. von Hans Mommsen / Dietmar Petzina / Bernd Weisbrod, Düsseldorf 1977, S. 341.

和は、経済の繁栄と密接に関連している⁴³⁾と述べているからである。他方、彼の労働組合論も注目さるべきであろう。労働者の経済的・政治的・社会的地位の向上は、労働組合運動のダイナミズムときりはなして考えることはできない。さらにメイスンは、「宣教者的 (missionaristische) 動機が分析的動機を完全に凌駕している⁴⁴⁾」とブリーフスを非難する。これもまた根拠の乏しい批判である。宣教者的情熱によって支えられているという理由から、だれも彼の学問を非難することはできない。その研究が十分に分析的であるかどうかという問題はそれ自体として検討されなければならないと思う。ブリーフスのプロレタリアート論は、なるほど問題の分析的・体系的把握において多々不十分なるところをもっているかも知れない。しかしながら、本節においてわれわれがみてきたプロレタリア的不安の社会経済的源泉に関するブリーフスの考察は、のちに経営社会学・経営社会政策論へつながる問題領域を発掘しており、しかもすでにある程度まで問題の核心に迫まっている。とくに「人間労働の材料化過程」や「労働者の従属化過程」の考察にそのことが明瞭に現われている。ブリーフスは、「経営に発するところの労働者生活の心的負荷を看過してはならない⁴⁵⁾」と述べている。経営がプロレタリア的不安の重大な発生源として認識されている。経営社会学へ発展する素地を十分にもっていたという意味において、彼のプロレタリアート社会学は高く評価さるべきであろう。

V 結 論

ブリーフスの『産業プロレタリアート論』は、ヨーストック、グンドラッハ、ネル・ブロイニング、ブラウアー、ミュラー等の資本主義研究と並んで、ワイマール期の社会的カトリシズムにおける代表的資本主義研究のひとつ

43) Briefs, Goetz : a. a. O., S. 240.

44) Mason, Tim W.: a. a. O., S. 341.

45) Briefs, Goetz : Das allgemeine Sozialpolitik. . . . , S. 521.

つに数え入れることができる。のちにモンツェルは次のように述べている。「キリスト教社会論固有の主題である社会倫理諸原理は、たとえそれがいかに平易かつ学識的に熱心に語られたとしても、社会的不安の発火点たる経営を基本的にとらえて、近代産業経営の倫理的な形成可能性を明確に認識することがなければ、真に改革的な働きをもたらすことはできない。社会教育家および社会改革者はすべからず、根本的かつ詳細に展開された経営社会学をすすんで受け入れなければならない⁴⁶⁾」と。そしてブリーフスを筆頭に一群のカトリック経営社会学者たちの研究をあげている。ブリーフスのプロレタリアート論は、社会的カトリシズムにおける資本主義研究の新たなる方向を開拓するとともに、その経営社会学的認識によってカトリック社会論に視野の拡大をもたらしたといえよう。

ブリーフスはこのように、経営を「社会的混乱の中心」あるいは「社会的不安の重大な震源地」として捉えて、「経営の中に生起した心的緊張は、経営自体においては解消され得ず、経営の外へ噴出して経済と社会の全体を動揺せしむる社会的不安の最も強力な動因となっている⁴⁷⁾」と述べるに至るが、われわれは、このような認識がすでにそのプロレタリアート論において展開されているのを見てきた。経営における人間疎外の問題がブリーフスを強く捉えはじめている。ブリーフスはいふ、「プロレタリア的賃金労働者が自由な自己決定にしたがう領域は極度に狭められている⁴⁸⁾」と。近代経営において、労働者はますます「自らをとるに足らないものと受け取る感情」(Gefühl der Dürftigkeit)、「無力感」、「人間的・人格的被制約意識」をもつようになっている。疎外感が労働者の中にアンタゴニズムとルサンチマンを醸成するのである。経営のどのような構造が労働者にかかる疎外感をもたらしているのかということについては、プロレタリアート社会学の認識はまだ不十分である。

46) Monzel, Nikolaus : *Katholische Soziallehre. 2. Bd.: Familie, Staat, Wirtschaft, Kultur*, Köln 1967, S. 437.

47) Briefs, Goetz : Vorwort, in; Bäumer Peter C. : *Das deutsche Institut für technische Arbeitsschulung*, München / Leipzig 1930, SS. VI-VII.

48) Briefs, Goetz : *Das allgemeine Sozialproblem. . . .*, S. 522.

さらに精緻な議論が展開されねばならない。この課題を担うことになるのが、ブリーフスの経営社会学である。

経営の人間問題は、労働組合論によっても把握されている。即述の如く、ブリーフスは、ブレンターノの労働組合論を克服することを自らの課題としていた。ブレンターノは、「売り渡される商品としての労働および売り手としての労働者の特質に由来する不利な結果が労働組合によって排除され、かくてはじめて労働は他の財と同じ売却財となり、他方で労働者は人間となる⁴⁹⁾」と述べている。ブレンターノは、労働の商品的特質を認識し、かかる特質の純化と完成を追求するところに、労働組合の本質をみていた。これに対してブリーフスは、全く対立する見解を主張する。「労働組合の中心的動機は、労働の商品としての特質を完全に実現しようとするところにあるのではなく⁵⁰⁾」
「労働組合の意味は、労働にとっての商品特質を制約もしくは完全に揚棄するところに存在する⁵⁰⁾」と。ブリーフスによれば、中心的事実は、「労働それ自体の商品特質ではなくして、労働なる商品の担い手たる人間の評価である⁵¹⁾」と。すなわち労働を担う労働者が一個の人間的・人格的存在として尊重されるべきであるという思想が、労働組合運動を生起せしめた中心的な倫理的な事実であるという。したがって次のようにいう、「厳格苛酷な経営規律、使用者や下層管理者への不断の従属体験、“材料的”取り扱い、賃金と労働の単なる売買関係が、人格的価値意識と衝突し、そこからまさに現代を特徴づける労働関係と労働過程の人的・社会的摩擦が生まれてきたのだ⁵¹⁾」と。われわれは、ブリーフスの労働組合論の中にも経営社会学へ発展する問題意識を見出すことができる。

資本主義的エートスの問題がブリーフスを強くとらえている。ブリーフスは述べている。「プロレタリア的不安の底層が世界観的・倫理的類いのもので

49) Brentano, Lujo : *Gewerkvereine*, in ; *Handwörterbuch der Staatswissenschaften*, 3. Aufl., Bd. IV, Jena 1911, S. 1115.

50) Briefs, Goetz : *Gewerkschaftswesen und Gewerkschaftspolitik*, in ; *Handwörterbuch der Staatswissenschaften*, 4. Aufl., Bd. IV, Jena 1927, S. 1116.

51) Briefs, Goetz : a. a. O., S. 1115.

あるならば、社会的緊張緩和は、この底層の変革と結びついている。かかる世界観的・道徳的領域における支配的価値の変革は、ある一定の社会階層の、少なくともプロレタリアート階層の事柄ではない。それは、社会のあらゆる階層において重んぜられている所有・利用・支配・享樂なる価値の転換である⁵²⁾と。ブリーフスがマックス・シェーラーと親交のあったことについては、序論で触れておいたが、資本主義エートス論にはシェーラーの深い影響がみられる。シェーラーの著作集『価値の転倒⁵³⁾』に収められている論稿「道徳の構造におけるルサンチマン」や「ブルジョワ」を一読するとき、ブリーフスがシェーラーにいかにも多くを負っているかがわかる。シェーラーに対する追悼文の中で、ブリーフスは、資本主義の将来に関するシェーラーの見解の核心を、「資本主義秩序それ自体とともに、それを支えている精神が変えられなければならないと主張した⁵⁴⁾」ところに求めている。これは、ブリーフス自身の主張であるとともに、社会的カトリシズムの伝統的主張とも重なり合っている。

52) Briefs, Goetz : *Das gewerbliche Proletariat*, S. 239.

53) Scheler, Max : *Vom Umsturz der Werte*, 2. Bände, Leipzig 1915. 飯島・小倉・吉沢編『シェーラー著作集 4・5』(白水社 1977年)

54) Briefs, Goetz : Max Scheler, in : *Magazin der Wirtschaft*, Jg. 4, 1. Halbjahr, 1928, S. 848.